

## 植民地統治とキリスト教 ②

おやさと研究所教授  
森 洋明 Yomei Mori

大西洋に面したコンゴ共和国の第二の都市ポワント・ノワールから約150kmのところ、第三の都市であるドリジー(Dolisie)という街がある。赤い土が特徴的なところで、雨季になると粘土質の土が靴底に粘り着く。ここにはフランス植民地統治時代に多くの犠牲を払って建設されたコンゴ・オセアン鉄道(2017年9月号参照)の駅があり、周辺の森を開発した林業で栄えた街である。

ドリジーはかつてコンゴ川の支流の名に由来してルボモ(Loubomo)と呼ばれていた。しかし、1991年の国民会議で、植民地統治の開拓期にサヴォルニャン・ド・ブラザの右腕として活躍したアルベール・ドリジー(Albert Dolisie)の名前にちなんで変更された。そしてこの開拓者ドリジーとともに植民地初期、コンゴのキリスト教化に専心したのが、リンゾロ(Linzolo)にコンゴで最初となる教会を設立したオグアール神父(Prosper-Philippe Augouard)であった。

オグアールは、1852年9月フランスのポワチエに生まれた。両親は熱心なカトリックの信者で、彼も小さい頃から教会に通っていた。幼少期から大変活発で好奇心旺盛だったが、好戦的な性格でもあり、人と衝突することもしばしばあったようだ。信仰の篤い両親は息子を神学校に入学させるものの、教官たちともいろいろな問題を起こし、ときには学校を追い出されたこともあった。1870年、18歳のとき志願して普仏戦争に従軍する。そのときに出会った一人の神父の助言が彼の運命を決定づけることになる。その神父に対しオグアールが「私の天命は神父になることだ」と言ったところ、神父から「君の意見には賛同する。しかしフランスでは絶対だめだ。なぜなら、君の抑制の効かない性格や頑固な姿勢では、きっと学監や司教とも衝突することになるだろう。だから、伝道するならもっと未開の地を選ぶべきだ」と言われるのだった。その後、神父の資格を得るためにあちらこちらの神学校で学び直す。彼にとってフランス以外の伝道地としてアフリカが決定的になったのは、ザンジバルで布教伝道をしてきた伝道師の話に感銘し、その修道会(Congrégation de Saint-Esprit)に入会したことだろう。

1876年、24歳で神父の資格を得た彼は、その翌年の1877年12月、初めてのアフリカ行きの機会を得る。出向地はリーブルヴィル(現在のガボンの首都)で、ガボンの叙任司祭の付き人の役目だった。そこで約2年間過ごしたのち、1879年11月にランダナ(Landana:現在のカビンダ)に移動した。ロアンゴ(Loango:コンゴの古王国の一つ)の司教となる人からは「この若い神父は通常以上の強靱な肉体を備え、実践的でエネルギーが豊富。こうした地域で伝道するには不可欠な要素を備えている」という評価を得たことでより天命を感じたのではないだろうか。1880年、オグアールはリーブルヴィルでブラザとも出会っており、お互いに評価し合う仲になっていた。ブラザは若い神父に対しスタンレープール(現在マレボと呼ばれているキンシャサとブラザヴィルを挟んでコンゴ川にある大きな水の溜まり)へ行くことを勧めた。

この1880年から10年間、コンゴで最初の司教となったカーリー・アントワヌ(Carrie Antoine)の下で伝道活動を展開。テケ族

などさまざまな部族の村を訪問、交渉の上に友好関係を築き、現地住民を入信させ、伝道の拠点を確保していくのだった。リンゾロに教会を設立したのもこの歩みのなかのことである。彼の伝道の範囲は、ブラザの進言の影響もあったのだろうか、スタンレープールに留まらずさらに北方へと進み、コンゴ川を遡ってウバンギ(現在のバンギ)にも及んでいる。黒人への伝道に際して一夫多妻制や呪術といった現地の習慣と対峙し、また当時奴隷制度は廃止されたとはいえ奥地では奴隷狩りも行われていたようで、奴隷となっている人を見つけては解放に尽力した。

1884年、パリに一時戻った彼は第三共和政を牽引するジュール・フェリーと面会し、この広大なコンゴの領土について熱心に語ったという。植民地の拡大を国民に訴えていたフェリーにとって大変興味をそそる話ではなかっただろうか。実際、伝道地の拡大は同時にフランスの統治領の拡大にも繋がっていた。ただ、1885年(～86年)のベルリン会議でアフリカが分割され国境線が確定すると、神父が布教拠点としていた北方はベルギー領に、南方はポルトガル領になってしまった。

常に活動的な彼は、現地人の中で「Diata diata」(vite:「早く」)と呼ばれていた。38歳でブラザヴィルの司教となり、のちに大司教に任ぜられる。約40年をコンゴで過ごし、この間にあちらこちらに布教の拠点を設け、学校や病院などを建て、道路の開発などにも携わった。彼の功績に対しフランス政府はレジオン・ドヌール勲章を与えている。ただ、彼の黒人に対する見方は他の開拓者と同様で、「嘘つき、稚拙、無節操」といった否定的なものだったようだ。また、黒人に対する強制労働にも賛同していたとも言われている(Martin, p.184)。その一方で、伝道者の名に相応しい生活を心がけていたとも言われている。

1921年、オグアールは所属する修道会のパリの施設で69年の生涯を終える。彼の死後、彼のコンゴでの功績に対し第三共和政で活躍した政治家の一人は「アフリカの最も野蛮な地域で、片手に聖書、もう一方に三色旗を掲げ、地域の文明化に貢献した」(Martin, p.81)と賞賛している。ライシテ(政教分離)が進められていた本国とは反対に、植民地開拓では「神と祖国」という両刀使いが賛辞されていたのだった。

オグアールはポワント・ノワールとブラザヴィル間(約500km)を合計17回行き来したと記録されている。しかも徒歩である。ドリジーからポワント・ノワールの間にはマヨンベの森と呼ばれている広大な森がある。それ以外のところでも、背の少し高い牧草地帯が続いている。私も幾度かその背丈ほどもある草木のなかを車で通ったことがある。ちょうど車一台の幅の細道が延々と続く。窓を開けていると草木の枝が身体に当たる。もちろん夜になると明かりは一つもない、そんな「大自然のど真ん中」というような環境を体感すると、徒歩で何度も往来した彼の強靱さ、そして天命を全うした固い意志がよりリアルティをもって感じられる。

[参考文献]

Jean MARTIN, *Savorgnan de Brazza 1852-1905, Une épopée aux rives du Congo*, Les Indes Savantes, 2005.

Philippe MOUKOKO, *DICTIONNAIRE GÉNÉRAL DU CONGO-BRAZZAVILLE*, L'Harmattan, 1999.